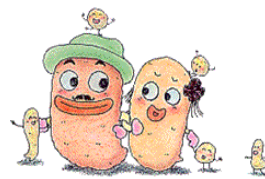


湯戸飛夜いけいけだよ



Jinen Joe family

発行 西徳山まちづくりの会

まちづくり研修旅行

萩・歴史と世界遺産の旅

平成 28 年 1 月 30 日から 31 日にかけての研修旅行で、参加者は男性 6 人、女性 5 人の 11 人です。午前 8 時に戸田駅前に集合し、JR で新山口駅まで行き、バスで萩へ行く行程です。

新山口駅は徳山駅と同じ橋上駅で、高架橋の南北自由通路で在来線口と新幹線口がつながっています。この広い通路の壁面が県内の野草で飾られており、ゆっくりとした時間が過ごせるようベンチも設けてあります。広場を意識し整備されているのでしょう。



萩には 10 時 45 分に到着しました。萩・明倫センターでは、「萩・世界遺産ビジターセンター 学び舎 (まなびーや)」が開催されており、運よく、この日がオープンの日で、オープン記念の薩長鍋 (薩摩の黒豚、長州の鮫鱈、土佐のかつおだし) をおいしくいただきました。

また、ご当地ゆるキャラの萩ニャンと西郷ドンも来場しており、一緒に記念撮影をしました。

昼食会場の萩博物館で昼食、見学をして、14 時 30 分から NPO 法人萩観光ガイド協会のボランティアガイドさんの引率で旧城下町を歩き、約 1 時間 30 分の行程で萩博物館に戻りました。丁寧な説明とこちらの歩調に併せたゆっくりとした速さでガイドしていただいたので、楽しく観光できました。また、観光地萩らしく案内板も整備されており、道に案内板が埋め込まれています。また、陶板の案内柱もあります。

宿泊は「萩本陣」で、美味しく、楽しく 1 日目を終わりました。

二日目は午前 8 時 30 分に宿を出発し、東光寺、吉田松陰の墓をお参りして吉田松陰生家跡を見学しました。

その後、昼食場所の道の駅「萩しーまーと」へ循環バスで移動し、2 班に分かれて昼食を摂りました。ここから無料の萩遺産観光シャトルバスで、恵美須ヶ鼻造船所跡と反射炉の見学をしました。

「萩しーまーと」では食事と買い物の時間を 2 時間計画していましたが、売り場を一回りして、お土産を買うと後はすることもなく手持ち無沙汰です。

前日の歩き疲れから早めに帰ろうとの事で、13 時 5 分のバスで松陰神社に行き、早々にお参りを済ませ、萩・明倫センター 14 時発の「スーパーはぎ号」で新山口駅に戻り、15 時 39 分の電車で戸田駅に帰りました。(呑)

記事:

・まちづくり研修旅行
「萩・歴史と世界遺産の旅」

・研修旅行参加者の感想

・花いっぱい運動
「喜んでもらえる花壇づくり」

・連載小説
『涙に咲いた紫の菖蒲』その 4

・てくてくウォーク
「西徳山海岸めぐりコース」

・お知らせ

会員募集中

あなたも「西徳山まちづくりの会」で一緒に活動しませんか。会では、常時、会員を募集しています。

連絡先:

(0834)63-3770

(神本)まで

研修旅行参加者の感想

今回の長所は、JRと高速バス及び萩市内を巡回する定期バスを利用した点で、公共交通機関を有効に利用した「まちづくり」の参考になり、大変有意義であると感じました（村）

「萩まちじゅう博物館」このキャッチフレーズは、私の心をひきつけたもののひとつでした。萩博物館の入場券には、『ここが「まちじゅう」への出発点』と書いてあります。このレストランを運営しているのもNPO法人、ホールでは土、日限定ではありますが、萩関連の手づくり紙しばいの上演、朗読もされています。観光ガイドもNPO法人です。「萩まちじゅう博物館」行政と連携しながら市民が萩を紹介しようという意欲が「まちじゅう」なのでは？と感じた研修旅行でした。（渡）

毛利家の奇数代の当主が祀られている東光寺。外界と遮断された厳粛な雰囲気と500以上もあり整然と並ぶ灯笼に感動&圧倒された旅行でした。食事とても美味しく、楽しいお酒をたくさん頂きました！（由）



笠山椿群生林

公共交通機関を利用した萩の研修旅行は、楽しかった。新山口駅の緑の中を歩く通路は気持ちが良い。世界遺産と産業遺産の歴史があり、ゆっくり数日かけてまた行きたい。ガイドマップがいろいろあり、おもてなしが伝わる。

笠山椿群生林の林の中は、一瞬怖さも感じたが、美しさに感動した。だいたい実る頃また行きたいね～（福&松）



東光寺にて

萩といえば夏みかん。どうして萩の特産物になったのか？夏みかんは江戸時代黒潮に乗って南方から仙崎に漂着し大切に育てられ、明治期には萩藩で職を失った武士への救済措置として夏みかんの栽培が奨励され、夏みかん3個と米1升で取引され萩藩の財政を夏みかんが支えたとのこと。

ボランティアガイドさんの話によると、もともと夏みかんは夏代々の名称であったが明治期関西方面へ出荷することとなり、大阪をはじめ関西地方では中風のことをヨヨと呼んでおり「代々」がヨヨと読めることから大阪商人は改名を求め今の夏みかんとなったそうです。

当時植えられた夏みかんの樹が今も萩市内に多く残り、山口県のガードレールの多くが黄色なのは夏みかんの色に由来しているとのこと。

沢山のストーリーがあり長州再発見の萩研修旅行でした。（酒）

花いっぱい運動

喜んでもらえる花壇づくり

車に乗って戸田駅前交差点を見ているとかわいい花々が咲いています。

でもそばに寄ると……

「びっくり、ポン」たくさんの草がのびています。

暖かくなり、また私たちの出番です。

毎月2回（第2、第4土曜日）に草取りをして、肥料を施し、今年も皆さんに喜んでいただける花壇づくりを目指します！

一緒に花壇づくりをしてみませんか。（じゅんこ 記）



連載小説

『涙に咲いた紫の菖蒲』 その4



文 城山 耕作

【前号までのあらすじ】

壇ノ浦の合戦に敗れて、命からがら白髪の浜に上陸した平清盛の落胤、山本泰盛は落ち延びようとしたが、途中で力尽き果て、行き倒れとなった。その山本泰盛を助けたのが、湯野の村長の娘の静である。静は、父親の松蔵に泰盛を会わせ、湯に入れ、食事を与え、松蔵の着物を着せ、大事にもてなした。さっぱりとした泰盛は、まさしく都の殿上人と思われる顔つき、いでたちであった。泰盛に対して訳ありと思った松蔵は、苔谷の小屋に泰盛をかくまおうとする。器量も気立てもいい娘の静も初夏には菖蒲が咲くという池の近くの小屋へ隠れ住むことを進めるのであった。名前も仙蔵と名乗ることにした。

こうして松蔵親子の取り計らいにより、苔谷の菖蒲が池の近くの小屋に住むことになった泰盛こと仙蔵は、ようやく落ち着いて物事を考える余裕が出てきた。壇ノ浦で散り散りになった平家一門の武士はどうなったのであろうか。一緒に壇ノ浦まで逃れてきた平家の女房たちは、あのまま海の藻屑となったのであろうか、都の六波羅の屋敷は焼き払われたのであろうか。そして、戦のむなしさに涙し、ひとり「小篠」という名を持つ横笛を吹くのであった。

その笛の音は、寂しくて戦で命を落とした者たちへの鎮魂の気持ちさえ込められていたのである。

静は毎日のように仙蔵に食事や、身の回りの世話をするために菖蒲が池の小屋にやってくる。そんな美しく気立てのいい静に、仙蔵の心は惹かれてくる。静も言うに及ばず、仙蔵を慕っている。

ある日のこと、仙蔵は静に

「静、そなただから打ち明けるのだが、わしは壇ノ浦の戦で敗れた平家一門の……」

静は仙蔵の言葉を途切り、

「おやめくださいませ。それ以上は聞きとうございませぬ。あなた様は仙蔵様にほかなりません。この世に仙蔵様は唯お一人、ずっとここにいてください。私にお世話をさせてください。」と言う静の頬には涙が一筋。

「静、そなた……」

「仙蔵様……」

静が、そっと仙蔵に寄り添うと、仙蔵はその手で、静をしっかりと抱きしめるのであった。

二人の恋を喜ぶように、菖蒲が池の菖蒲もそのつぼみを膨らませていた。

静の器量の良さと優しさは、高嶺の花として多くの里の男をあきらめさせたが、庄屋の甚兵衛の長男、市太郎だけは、財産にモノを言わせ、静を嫁にしようと焦がれる毎日を送っていた。そんな市太郎だから静の動静が気になって仕方がない。いつも静の行き先を窺うようにしてい

た。そんな風だから、静が仙蔵に会いに行くのも、まもなく市太郎の知るところとなるのは必然であった。

菖蒲が池の小屋まで、後をつけていった市太郎は、静と仙蔵が仲良く会話しているのを見て、嫉妬の炎を燃やすのである。

「ややっ、俺の静があんな男とねんごろになっている。あの男さえいなければ、静は俺の嫁に来るに違いない。」とばかりに、市太郎は谷を転げるように降りていき、代官所に転がり込んだのである。「お、お代官様。苔谷の菖蒲が池の近くの小屋に都の公家かとも見える怪しい若者がおります。なにとぞ、お取り調べを。」と訴え出た。その頃には源頼朝の幕府が代官所を抑えており、平家の落ち武者狩りも容赦なく始まっていた。

その夜のこと。仙蔵が静と別れて、一人物思いにふけていた。

代官所の武士たちは、物々しいいでたちで仙蔵のいる小屋を取り囲んで、じりっ、じりっの間合いを詰めていく。

「者ども、かかれ。」という合図とともに武士たちは小屋の戸口を打ち破ってなだれ込んだ。

「何者だ。無礼であろう。わしを平清盛の息子、山本泰盛と知っての狼藉か。」

さすがに、平家の棟梁の一門である。この期に及んで逃げも隠れもしない。きちんと自分の氏素性を名乗ったのである。武士たちはそれを聞いて怯んだが、まもなく泰盛は武士たちの手によって、その最後を迎えたのであった。

翌日、何も知らない静は、いつものように菖蒲が池の仙蔵のもとに行くのと、小屋は血で染まり、仙蔵がいない。静は、半狂乱になって仙蔵の行方を探したが、その姿はどこにも見つからなかった。小屋には仙蔵の大切にしていた錦の袋に入った「小篠」だけが残されていた。

仙蔵が殺されたと悟った静は、その錦の袋を抱くと、我を忘れたように歩き始めた。

「仙蔵様、あなたなしでは生きていけません。あの世で会いましょう。」

いくら待っても帰らない静が心配になった松蔵は、村人たちと捜索に出かけた。菖蒲が池のほとりで静の草履が見つかったのは、まもなくのことであった。菖蒲が池の水面に、錦の袋が浮かんでいたのである。

そして、紫の菖蒲が、二人の命を惜しむかのように、かすかにそよ風に揺れているのであった。(完)



西徳山まちづくりの会

編集後記

城山耕筈氏の「涙に咲いた紫の菖蒲」が大団円を迎えました。氏の話によると、この物語は、平家の残党が苔谷に住んだという湯野の言い伝えをもとにしたもので、時代背景を壇ノ浦合戦の後としたとのこと。

ちょうどこの戦乱の時代にあって、俊乗坊重源は東大寺再建の勸進職に任命されていたとのこと。所謂寄付を全国から集める総元締めのようなものです。鎌倉幕府もその寄付の要請に応じていたようです。そして、徳地に再建の材木を求めて重源自身もやってきたのです。建立の総監督のようなこともしていたようです。このように「伝説の一端から、歴史の流れが見えてくるので、もっと西徳山の伝説や言い伝えにも関心を示してほしい。」と、城山氏は語っています。

発行責任者

会長 神本康雅
広報部長 木曾裕子

西徳山まちづくりの会

ホームページ URL:

nishitokuyama.web.fc2.com

第17回てくてくウォーク

西徳山海岸めぐりコース

平成28年3月13日、早春のウォーキングには絶好の空の下、老若男女28人が元気よく戸田駅を出発しました。

波静かな瀬戸内海を眺めながら、ゆったりと行くコースで、戸田駅から線路沿いを海岸線へ向かって、てくてく。漁港や漁船の賑わいを横目に、1時間半かけて津木公民館へ到着しました。「企業組合ひとめぼれ」の美味しいおにぎり弁当を食べ、昼食休憩を1時間とり、12時30分に長田海岸に向かって出発。春の海を眺めながら夜市川沿いを上り、1時間半かけて終点戸田駅を目指しました。

このコースは3回目で、1回目は秋、2回目は冬、今回は春と季節のうつろいや春の兆しを目と肌で確かめながら歩く16kmの道のりは3回目ならではの格別なウォークでした。

西徳山地域の親睦と健康づくりをテーマに始まったてくてくウォークも、回を重ねて今回は17回目となりました。

戸田駅を起点として、西徳山の恵まれた自然や景色を堪能し、古(いにしえ)の歴史や伝統を再発見するウォーキングを、楽しみにされている方も増えてきました。てくてくと歩きながら、野の草花に語りかけ、青空を仰いで深呼吸するような楽しい気楽なウォーキングを地域に広めていけたらと思っています。



皆さん、是非一緒に“我がまち”を楽しく歩いてみませんか？

湯野・戸田・夜市公民館、道の駅ソレーネ周南、戸田駅の掲示板、ホームページ等でお知らせしています。

次回のウォーキングは5月に予定しています。

皆さん ぜひ一緒に古里を楽しく歩きましょう。

参加ご希望の方は、西徳山まちづくりの会てくてくウォーク担当 國澤(0834-83-2762)までご連絡下さい。

お知らせ

西徳山まちづくりの会総会

平成28年4月23日(土)15時から戸田駅前広場で総会、懇親会を開催します。参加費は3,000円(まちづくりの会会費を含む)です。BBQと一緒に楽しみ、まちづくりについて語り合しましょう。ご参加ください。

西徳山まちづくりの会全体会

原則として毎月第1水曜日の18:30から夜市公民館で開催します。全体会終了後、映画鑑賞会「そうだ!!昔の映画を見よう!」を行っています。興味のある方は遠慮なくご参加ください。

戸田駅前花壇の手入れ

毎月第2、第4土曜日の17時から、戸田駅前広場の清掃と花壇の手入れを行っています。お手伝いしていただける方、大歓迎です。